



むかし、ある山の中に、わかもの若者と年とった母親がふたりで暮らしていました。

ある日のこと、若者がいつものように山で木を切っているとき、どこからか苦しそうなさけびごえが聞こえてきました。

声をたよりに行ってみると、大きなとらが、口を大きく開けたまま苦しそうになっていました。そばへ寄っておそるおそる口の中をのぞいてみると、のどにかんざしがささって

ました。若者は、

（こいつ、女の人を食ったんだな）と思いました。かわいそうなのでかんざしを抜いてやりました。とらは、何度もおじぎをして山のおくへ帰っていきました。

それからというもの、とらは毎日、山の木をひっこぬいては、若者の家の庭に投げこむようになりました。おかげで、若者は苦労して山で木を切らなくても暮らしていけるようになりました。

ある日のこと、とらが、美しい娘を若者の家に投げこんでいきました。娘が気を失っていたので、若者と母親はおもゆを飲ませて介抱しました。娘は都の大臣の娘でした。娘は、

「あしたはわたしの結婚式なのです。髪を洗ってたくしてしましたら、とらが飛びこんできてここへさらってきたのです」といいました。若者は、とらが自分のために花嫁をつれてきたのだと知りました。

やがて、若者と娘は夫婦になりました。

ふたりは、娘の親たちにあいさつにいくことにしました。けれども、山の中にはお土産に持っていくものが何もありません。とらはそれを知って、結婚式やお祭りのある家にかたっぱしから飛びこんでいって、たくさんのお餅やお菓子、ごちそうを持って帰ってきました。牛や馬までぬすんできました。若者は、牛や馬にたくさんのおくを贈り物をつんで都に向かいました。

大臣は、死んだと思っていた娘が帰ってきたのでおおよろこびでふたりを迎えました。若者は、年とった母親を都に呼び寄せていっしょに暮らしました。

何年かたったあるとき、都に大きなとらが現れて人や牛を食い殺し、大騒ぎになりました。王さまは、弓や鉄砲の名人たちを集めて、とらを退治させようとしたが、とらは駆けまわって、弓も鉄砲もどうしても当たりません。そこで王さまは、こんなおふれを出しました。

とらを退治した者には、千金を与え、大臣に取りたてよう

その晩、とらが若者の家にやって来ていいました。

「わたしはもう死ぬ年になりました。どうせ死ぬなら、あなたにてがらを立てさせてあげましょう。あした、私が都へ出て暴れますから、あなたはどんな鉄砲でもかまわない、私を撃ってください。ねらいなど定めないで、かってにぶっ放してくればよろしい。わたしはきつと倒れて死にます」

つぎの日、若者は、

「わたしがとらをしとめましょう」と、王さまに願ひ出ました。

まもなく、とらが町に現れて暴れました。若者は出て行って、ろくろくねらいも定めず鉄砲をぶっ放しました。玉はみごと<sup>ごと</sup>に当たってとらは倒れました。

若者は、大臣に取り立てられ、千金のほうびをもらって、いつまでも幸せに暮らしたということです。

原話：『朝鮮民潭集』孫晋泰著 勉誠出版刊

再話：村上郁